

トロロブから見たディケンズ

齋藤 九一*

(平成11年10月29日受理)

要 旨

トロロブとディケンズはわずか3歳違いたが、ディケンズの人気作品『ピクウィック・ペイパーズ』に遅れることおよそ20年で、ようやくトロロブは出世作『院長』を出版した。この点で、トロロブはディケンズとは別の世代に属しているように見える。後輩トロロブはディケンズをどう見たか。本稿はトロロブのテキストの中にディケンズを捜す。3種の資料が検討される。すなわち、トロロブの小説作品、手紙、そして自伝および追悼文中のディケンズ批評である。一言で言えば、ディケンズは、トロロブの目には、途方もなく大衆的な人気があるが、その強烈で「ギクシャクした」文体を模倣すると危険な、あるいは、模倣するのが不可能な作家であった。

KEY WORDS

Anthony Trollope reference	アントニー・トロロブ 言及	Charles Dickens text	チャールズ・ディケンズ テキスト
-------------------------------	------------------	-------------------------	---------------------

1. 後輩作家

Anthony Trollope (1815-82) は年齢的には Charles Dickens (1812-70) とわずか3歳しか違わない。しかし、トロロブが32歳で最初の作品 *The Macdermots of Ballycloran* を出版した1847年に、ディケンズは長編としては第7作目に当たる *Dombey and Son* (1846-8) を月刊分冊の形で出版しつつあった。また、トロロブの第4作目の *The Warden* が出た1855年には、ディケンズは *David Copperfield* (1849-50) という一つの頂点をすでに越えて、後期の傑作の一つ *Little Dorrit* (1855-7) の出版に取りかかっている。

いわゆるパーセットシャー物語の第1巻 *The Warden* をトロロブの世間的な意味での最初の成功作とすれば、ディケンズのそれ、例えば *Pickwick Papers* (1836-7) に遅れること約20年となる。これはほとんど別世代とも言える差である。そのような意味で、わずかな年齢差にもかかわらず、作家としてはトロロブをディケンズの後輩と言うことは可能だと思われる。この後輩作家から見たディケンズはどのような存在であったか。そのことを明らかにする手掛かりを求めるのがこの小論の目的である。

2. トロロブがディケンズに言及している資料

「トロロプから見たディケンズ」という主題を考えると、その具体的な作業は、まずもって、トロロプのテキストの中にディケンズを捜すことから始めるしかない。しかし、トロロプのテキストの中のディケンズと言っても、明示的なものと明示的でないものがありうる。前者はディケンズ本人の名前や作品名・登場人物名などが明示的に言及されているものであり、後者は、例えば、主題や手法の点でディケンズの影響が暗示されているものなどである。

今回、「トロロプから見たディケンズ」という主題の手掛かりを求めようとするこの小論では、明示的な言及に限定して考察することにする。その資料としては、次のものがある。(1)トロロプの小説の中のディケンズ、(2)トロロプの手紙の中のディケンズ、そして、(3)トロロプの自伝および批評文の中のディケンズである。同じ書き手の文章とは言いながらそれぞれ執筆状況に明確な違いがある。すなわち、それぞれ、フィクション、私的な書簡、公表を前提とした自伝や批評という性格を有する。これらの違いを念頭におきながら資料を通読すれば、そこにある程度一貫して見られるトロロプのディケンズ像あるいはディケンズ評価というものをまとめることは可能だと思われる。先行研究がほとんどないことを考慮して、気づいた言及箇所はできるだけ引用して、今後の研究の参考に供したい。

3. トロロプの小説の中のディケンズ

まず小説の中のディケンズへの言及であるが、今回、トロロプの全小説を網羅的に調査する余裕はないので、初期の3作品に限って提示する。わずかなサンプルだが、それでもなかなか内容的には多様性に富み、トロロプがディケンズを様々な形で意識していたことを推測させるに足る。

まず、最初の作品 *The Macdermots of Ballycloran* (1847) 第5章に *Nicholas Nickleby* (1838-9) への言及がある。主要人物の一人のジョン神父が貧しいながらも大変な読書家・蔵書家であることを述べたぐだりに登場する。

His other expensive taste was that of books; he could not resist the temptation to buy books, books

of every sort, from voluminous editions of St. Chrysostom to *Nicholas Nicklebys* and *Charles O'Malleys*; and consequently he had a great many. (Trollope, *Macdermots* 43)

これは *The Macdermots* という物語が発表時期より10年程前に起こった話という設定に沿い、クリュソストモスのような古典に対して、当代の人気作品の一例という意味で *Nicholas Nickleby* を引き合いに出したもので、特にディケンズのこの作品が *The Macdermots* とテーマ的に関わっているとは思われない。ちなみに、*Charles O'Malley* は Charles Lever の1840-1年の作品だから、物語の設定に比して多少のアナクロニズムをトロロプは犯している。

次の例は、トロロプの読者ならおそらく誰でも記憶しているものである。第4作 *The Warden* の第15章でディケンズを Mr. Popular Sentiment という名の社会小説家として言及し、批評している。

... Mr. Sentiment is certainly a very powerful man, and perhaps not the less so that his good poor

people are so very good, his hard rich people so very hard, and the genuinely honest so very honest. (Trollope, *Warden* 135)

... The artist who paints for the million must use glaring colours, as no one knew better than Mr. Sentiment.... (137)

したがって、トロロプはディケンズの力強さは一種の誇張された人物造形や文体から来ていると見ている。しかしその一方で、次のようにも言っている。

... Perhaps, however, Mr. Sentiment's great attraction is in his second-rate characters. If his heroes and heroines walk upon stilts, ... their attendant satellites are as natural as though one met them in the street.... (135)

すなわち、ディケンズに見られる誇張や理想化を揶揄するとともに、全くそれとは逆の、副人物によく見られる自然さを指摘した言葉が注目される。この副人物の自然さ・不自然さという問題は、少し微妙なニュアンスの違いが同じトロロプの他のテキスト（追悼文・自伝）との間に見られるので、後で触れる。

次にトロロプの *The Three Clerks* (1858) だが、ここでは3種類の言及が見られる。まず第一に、比較的軽いもので、ディケンズの登場人物をそのまま何気なく自分の作品に登場させるというレベルの言及・引用である。

... Her dresses were made at the distinguished establishment of Madame Mantalini, in Hanover Square.... (*Three Clerks* 252)

... He danced round the room with noisy joy, till Mrs. Gamp made him understand how very unsuited were such riotous ebullitions to the weak state of his lady-love upstairs.... (274)

前者 Madam Mantalini はディケンズの *Nicholas Nickleby* の仕立屋、後者 Mrs. Gamp は *Martin Chuzzlewit* の助産婦で、ディケンズの異なる作品の人物がトロロプの *The Three Clerks* 中の挿話（作家志望の登場人物 Charley Tudor の最初の作品と言う設定）の中に登場する。どちらもディケンズの中で有名な人物なので、特に人物描写の必要もなく、それぞれ仕立屋あるいは助産婦として登場している。

次に、作品の全体的な主題に関わるものとして、第1章における Circumlocution Office (*Little Dorrit*) への言及がある。

It is generally admitted that the Weights and Measures is a well-conducted public office....

It is exactly antipodistic of the Circumlocution Office, and as such is always referred to in the House

of Commons by the gentleman representing the Government when any attack on the Civil

Service,

generally, is being made. (1)

The Three Clerks には通称 Weights and Measures(度量衡管理局)というお役所が登場するが、これがディケンズの *Little Dorrit* に出る Circumlocution Office (繁文縟礼局)の正反対の非常に能率のよいお役所ということになっている。これは、ディケンズの包括的なお役所批判に対抗して、郵政省の職員でもあったトロロプがより精密なお役所の姿を小説という形で書いたという意味がある。ディケンズでは、例えば Arthur Clennam や Daniel Doyce という外部の人間がお役所に翻弄される姿が描かれるわけだが、トロロプの場合は、タイトルからも明らかのように3人の若い公務員を主要人物として、私的な恋愛や結婚ばかりでなく、公務員であるがゆえの競争や様々な誘惑に対するそれぞれの身の処し方を、お役所の内情をよく知る者の視点から描いている。当時のある批評家の言葉を借りれば、ディケンズのお役所批判が a funny sketch であるとすればトロロプのそれは a genuine photograph であった (E. S. Dallas 105)。さらに、この作品は単なる客観的なお役所批評というにとどまらず、登場する3人の公務員の一人で作家志望の Charley Tudor はトロロプ自身をモデルにした人物である。その意味では、*The Three Clerks* は、トロロプにおける *Little Dorrit* であるばかりでなく、*David Copperfield* でもあると言ってもよいかもしれない。

The Three Clerks におけるディケンズへの言及の3番目は、反社会的な悪人のタイプを論じる箇所、ディケンズの *Oliver Twist* の Bill Sykes が引き合いに出されている。

... but with Bill Sykes we may contrast [Undy Scott] as they flourished in the same era, and had their points of similitude, as well as their points of difference. (529)

... Is it not the fact, that, knowing him as you do, you could spend a pleasant hour enough with Mr. Scott, sitting next to him at dinner; whereas your blood would creep within you, your hair would stand on end, your voice would stick in your throat, if you were suddenly told that Bill Sykes was in your presence? (530)

ディケンズの Bill Sykes は境遇ゆえにいわば選択の余地なく悪人であるのに対して、トロロプのこの小説に出る Undy Scott は貴族の子弟で国会議員でもありながら、地位を利用した悪事を行い、かつ、主要人物の一人である有能な公務員をスキャンダルと破滅の道に誘う。引用の後半にあるように、Bill Sykes 的な一目でそれと知れる悪漢ではなくて、紳士として淑女と同席しうる社会的地位を持った、それゆえに一層極悪な悪人を描いたという点にトロロプの自負が感じられる。

4. トロロプの手紙の中のディケンズ

手紙におけるディケンズへの言及の例としては2つの点を取り上げる。まず、ディケンズの1867-8年のアメリカ旅行をめぐる手紙によって、トロロプとディケンズの関係における微妙な距離感について考えたい。

I shall be most happy to be one of the Stewards at the dinner proposed to be given to Mr. Dickens on Saturday November 2--& will certainly make one of the party on that occasion. (Trollope, "To Charles Kent", October 18, 1867)

About Dickens' dinner the dean should write to Charles Kent, (whom I do not know & never heard of till I got the enclosed). This will tell him all I can tell. You & he know that I am not specially in that set, but having been asked I did not like to refuse. (Trollope, "To Mrs. Frances Elliot", October 23, 1867)

I go to America to make a postal convention, not to make money by reading. I fear I shall bring back a very small bag. (Trollope, "To A. H. Layard", April 5, 1868)

Charles Kent 宛の手紙で、渡米するディケンズのために晩餐会の steward (幹事・世話役) を「喜んで」引き受けると書いたトロロプは、Mrs. Elliot 宛の手紙では、「自分は特に(ディケンズを取り巻く)仲間ではないが、(幹事役を)頼まれたので断れない」という言い方をしている。トロロプはこの頃ディケンズに少し遅れて渡米することになるが、A.H. Layard 宛の手紙では、自分のアメリカ行きは国際郵便協定の交渉が目的で「朗読で金儲けをする」ためではないと言って、暗に現在渡米して朗読会を成功裡に行っているディケンズを揶揄している。このように言いながら、興味深いことには、4月22日にディケンズがニューヨーク港を離れようとしている船に、別の船でイギリスから到着した直後のトロロプがあわただしく見送りに駆けつけてディケンズをたいそう感激させるという一幕があった。

次に注目したいのは、1872年のジョージ・エリオットと G.H.ルイスに宛てた手紙である。ディケンズの友人であったジョン・フォースターの『ディケンズ伝』に対するトロロプの感想が記されている。

Forster's first volume is distasteful to me, --as I was sure it would be. Dickens was no hero; he was a powerful, clever, humorous, and, in many respects, wise man; --very ignorant, and thick-skinned, who had taught himself to be his own God, and to believe himself to be a sufficient God for all who came near him; --not a hero at all. (Trollope, "To George Eliot and G. H. Lewes", February 27, 1872)

すなわち、『ディケンズ伝』第1巻について、トロロプは「不快だ」と言い、「ディケンズは力強く、才気があって、ユーモラスで、多くの点で、賢明な人であった」反面、「非常に無学で、厚かましく、自分自身にも、また、取り巻きの人々にも、自分が神のような存在であると思込んでいた。ディケンズは決して英雄として称賛できる人ではなかった」と述べているわけだが、おそらく手紙という媒体ゆえの、非常に率直なディケンズ批評である。

5. トロロプの自伝および批評文の中のディケンズ

最後にトロロプの自伝および批評文(ディケンズ追悼文)におけるディケンズへの言及は、分量的にもまとまっており、また、公表を前提としていることから重要である。どちらも、*Dickens: The Critical Heritage* に抜粋が載っており、ディケンズ研究者に比較的好く知られた資料なので詳しい引用は避けて要点のみ述べるにとどめる。

1870年6月9日のディケンズの死去に際し、トロロプは *St. Paul's Magazine* 7月号に追悼文を書いた。まず、最初にディケンズの並ぶ者のない大衆的な人気を確認した後で、中程で、トロロプは、ディケンズが生み出した多様な登場人物 (characters) に触れ、まるで「我々の親密な友人(our own intimate friends)」のようだと言っている。その一方で、ディケンズの人物がどんなに不自然でも、その力強さによって、「第二の自然 (a second nature)」を作り出すのだと述べているところが興味深い (“Anthony Trollope on Dickens” 323-6)。

次にトロロプの自伝におけるディケンズ評だが、まず、ディケンズの大衆的人気の秘密として、大衆を喜ばせ、かつ、教訓が健全であることを述べている。次に、ディケンズの登場人物について、あたかも親しい人間のように感じられるが、自然な人間ではないと言っている(Trollope, *Autobiography* 247-9)。上記の *The Warden* で副次的な人物達が通りで会う人間のように言っているところと微妙に違っていることに注意しておきたい。ディケンズの人物造形をめぐる自然さ・不自然さ、あるいは、親友のような親しさを作り物めいた感じという微妙に食い違う印象をトロロプは一見矛盾した言葉で、無意識に、とらえているとも言える。そして最後に、ディケンズの文体について、「ギクシャクして慣用的でなく、規則を無視して作り出されたもの」(jerky, ungrammatical, and created by himself in defiance of rules)で、決して称賛できないものだが、まさに、そのような言葉を手段として、ディケンズが読者大衆の心を満たしたことを、正直に認めざるを得ないと言っている。このトロロプの批判的な言葉は、ある意味では、ディケンズの長所を逆の方向から思いがけなくうまく表現しているのではないかと思われる。つまり、ルールを無視したギクシャクした文体や人物造形にも「かかわらず」大衆的人気がある、とトロロプは言いたげだが、「それにもかかわらず」ではなく、まさに「それゆえに」ではないかと思う。それというのも、このギクシャクしたように見える文章で読者の心に強い印象を与えるのは、まさに、ディケンズの活発な想像力が言葉をねじ伏せるようにして生み出す斬新なイメージやメタファーの強烈な効果そのものであるからだ。トロロプもまさに create という言葉を使っている。

以上のことから、総合的に伺われるトロロプにとってのディケンズという存在は、一言で言えば、大衆に支持された powerful な作家であるが、決して安易に模倣してはいけない・模倣できない作家、ということである。

6. トロロプとディケンズ：伝記と小説（今後の課題）

以上は、トロロプが明示的にディケンズに言及している資料によるまとめだが、さらに考

察を進めるとすれば、さしあたって二つの方向が思い浮かぶ。すなわち、一つはトロロプが直接言及しているわけではないディケンズとの関係を伝記的資料から探ることである。(例えば、トロロプの兄 Thomas Adolphus Trollope (1810-92) が、Dickens の愛人といわれる Ellen Ternan の姉 Fanny Ternan と結婚 (1866) したことによって、ディケンズとトロロプは私生活においても意外に近い関係にあったはずである。) もう一つはディケンズと「後輩作家」トロロプのそれぞれの作品に見られるいくつかの共通主題をめぐって比較・分析することである。今回 *The Three Clerks* については多少触れたが、その他に、例えば、特にバーセットシャー物語などから受ける印象によって一見して平明で穏やかそうに思われるトロロプの作品にしばしば見られる激しい感情や暴力の描写とディケンズのそれとの比較や、あるいは、*Little Dorrit* の Mr. Merdle と *The Way We Live Now* の Mr. Melmotte という二人の “swindling financier” (*Oxford Companion to English Literature*) の比較、さらには、フランス革命を素材にした *A Tale of Two Cities* と *La Vendee* の比較なども、考えられるが、いずれも今後の課題である。

(追記：本稿は 1999 年 6 月 5 日に中京大学で開催された「ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会」のシンポジウム「後輩作家から見たディケンズ」で発表した内容に加筆したものである。)

参考文献

- Dallas, E. S. “Unsigned review in *The Times* 23 May 1859”. *Trollope: The Critical Heritage*. Ed. Donald Smalley. London: Routledge & Kegan Paul, 1969.
- Hall, John, ed. *The Letters of Anthony Trollope*. 2 vols. Stanford, California: Stanford U. P., 1983.
- Trollope, Anthony. *An Autobiography*. 1883. Oxford: Oxford U. P., 1980.
- . *The Macdermots of Ballycloran*. 1847. Oxford: Oxford U. P., 1989.
- . *The Three Clerks*. 1858. Oxford: Oxford U. P., 1907.
- . *The Warden*. 1855. Harmondsworth: Penguin Books, 1982.
- . “Anthony Trollope on Dickens.” *Dickens: The Critical Heritage*. Ed. Philip Collins. London: Routledge & Kegan Paul, 1971.

Trollope and Dickens

Kuichi SAITO

(Received on October 29, 1999)

ABSTRACT

Anthony Trollope was only three years junior to Charles Dickens, but it is almost twenty years after Dickens's immensely popular *Pickwick Papers* that Trollope published *The Warden*, which launched his famous Barseshire series and won him social recognition as a writer at last. In this respect, it seems as if Trollope had belonged to a different generation from Dickens.

How did Trollope the latecomer see Dickens? In order to answer this question, this article tries to seek references to Dickens in the text of Trollope. Three kinds of text are examined: Trollope's novels, his private letters, and his critical comments on Dickens included in his autobiography as well as in the obituary he wrote for Dickens. Through reading these texts and analyzing the references to him, Trollope's estimation of Dickens is deduced. In a word, Dickens in Trollope's eyes is an immensely popular writer whose powerful but "jerky" style is dangerous, or rather impossible, for others to imitate.

